

鶴岡まちなかキネマ

正会員 高谷時彦 君

『鶴岡まちなかキネマ』は、鶴岡市の中心市街地からやや外れた、工場跡地に立地する。この地域では、大正期から主要な産業のひとつとして絹織物が盛んに生産されてきた。このことから、敷地周辺には、大正末期から昭和40年代まで、木造、鉄骨造、鉄筋コンクリート造の大小様々な工場が建設された。その後、織物業の衰退とともに工場は操業を停止し、いくつかの建物が使用されないまま存在していた。この作品は、それらの工場群のうちで、昭和初期に建設された木造建築を改修・用途変更し、4室のホールとレストランからなるシネマコンプレックスとしたものである。

ここでは、約6間の長大な陸梁によって形成されたキングポストおよびクイーンポスト・トラスによる小屋組を露出させ、空間の骨格を明確に視覚化することで、この建物の建築的な魅力を伝えている。また、既存の小屋組を残しつつ、シネマという新たなプログラムに必要となる天井高を確保するために、架構を維持しながら床を掘り込み、地下方向に鉄筋コンクリート造の客席を増設するという、施工技術上の課題をクリアすることにより構造を成立させている。内部空間には、落ち着いた色調の木質系素材を多用することで、親密な雰囲気を生み出すことに成功している。これらの比較的明快な建築的提案に加え、建物の分棟化、トップライトの新設、長手壁面へのバットレス的鉄骨柱の追加等、新たなプログラムや関連法規に対応した細やかで粘り強い工夫が、設計者により重ねられている。

経済の停滞が長く続く中、建築を取り巻く状況は安泰と言えない。新築物件の減少はいうまでもなく、既存建物の維持・管理さえままならない状態となりつつある。こうした中で、「なぜその建物がつくられる、あるいは維持され続ける必要があるのか？」が厳しく問われる時代となった。建物が立地する場所や地域に、またそこで暮らす人々に本当に必要とされているか、使い続けることはできるか、言い換えれば空間的な魅力や経済的な合理性に加え、地域やその住民に対する広い意味での役割を果たせるか、つまり「建築に何ができるか？」という根源的な問いに対する答えが、建築に関わる人々に求められている。こうした状況において、所有者、運営者、現場担当者をはじめ、地域社会の強い後押しを受けて実現に至ったこのコンバージョン建築は、幸運な道を歩み始めているように見受けられた。今後はその運営をとおして、利用者・運営者である地域住民に支持されることを願ってやまない。

これらのことから、『鶴岡まちなかキネマ』は、地域の歴史を刻んだ建築ストックに対して、その現状や今後のあり方を睨みつつ、既往の技術や使用用途を巧みに組み合わせ、丁寧に再活用した事例であり、建築が地域社会に対して果たす役割・可能性の一端を示すものとして高く評価された。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。